

人間も動物であり生物の一員なので生物学的に見ると基本的な仕組みはなにも変わりません。とくにミクロの世界になればなるほど区別はなくなってしまいます。

■人間と動物のちがい



人間と動物との間で  
共感関係をきざずく

〈特別インタビュー〉  
福岡伸一さん

ふくおか しんいち / 1959年東京生まれ。生物学者。米国ハーバード大学研究員、京都大学助教授などを経て、現在、青山学院大学教授。分子生物学専攻。ベストセラーの『生物と無生物のあいだ』、『動的平衡』など、『生命とは何か』をわかりやすく解説した著書多数。

例えば専門家でも顕微鏡でこれが人の細胞なのかネズミの細胞なのかわかりますかと言われたらわからないことがあります。それからさらにDNAの遺伝子配列を見せられて、これが人の遺伝子なのかミミズの遺伝子なのかと言われると、その遺伝子の物質自体は変わらないですし、その順列組み合わせ

がちよっとちがうだけです。ミクロのレベルになればなるほど人間を特別な生物とすることはできないのです。みんな生き物は同じ生命体だという見方がむしろ大きくなっていきます。

ただ、人を人たらしめているもの、つまり他の生物とはちがうところが一つだけあります。それは、人間だけがだんだん脳が大きくなって、世界の仕組みというのを調べたり解明したり研究したりするようになって、自分自身の生命のあり方を研究してきたことです。すべての生物には遺伝子という共通の基盤があって、その遺伝子の基本的な命令は産めよ増やせよという、種が繁栄することです。すべての生物はそれに従って生きていますが、唯一人間だけは遺伝子の命令に必ずしも従わなくても、個人として生きてもいいというところに気がついた。初めて遺伝子の命令から自由になった生物といえるのです。

他の生命体のほとんどは、種の存続ということが最優先されています。だから昆虫でも魚でも卵を何千個も生んで、そのなかで何匹かが生き残って次の世代をつなげばいいという考え方です。でも人間だけは種の存続よりも個体の方に尊厳があることに気がつき、そのことに価値をもった生物です。産めよ増やせよということに参加しなくても、その生命体は、個体として生きる権利があるし、自由に生きる意味があるという価値を初めて共有できたのが人という種です。

個々の生命に意味があり価値があり、それがまっとうされることを大切にすると、種より個を大切にするといいことに気がつき、それ



特集

動物とくらす

犬は狩猟採集民に猟犬や番犬として必要とされ、猫は農耕の開始に伴い人に飼われるようになったといわれています。ともに生きるパートナーやペットとして、身近で親しみのある動物たち。動物たちのいるくらしは私たちにどんな影響があるのでしょうか。動物と仲良くなる秘訣など寒い冬に読んでほっこり過ごせる特集です。

